

## 2015年度 生活介護事業 報告書

久永 洋

2015年度は特別支援学校卒業生2名の新利用者を迎えスタートする。年度途中からは、新たに数名の利用者の契約もあり、定員を超えての契約人数であり、各班の活動に際し、その都度支援の必要性や彼らの居場所作りということを念頭に日々の生活を過ごせるよう環境調整をした。スタッフの新規採用については、パートタイムで勤務する職員を数名採用し、職員間での連携第一に考え進めた。

活動場所としては、軽作業班（1階フロア）園芸班（1階フロア・畑）手工芸班（紙漉き場）ふきのとう班（2階フロア）つむぎ班（パン工房北側の部屋）で行ない、活動内容としての大きな変更はなく、昨年度同様、各班それぞれの班のカラーを出し合いながら日中活動を実施した。

昨年度に引き続き、特定相談支援事業ふーぶとの連携を図りながら、必要に応じて担当者会議、ケース会議等を実施し、利用者主体の支援の方向性を本人やご家族に確認しながらすすめている。

### 軽作業班

内職作業（受注作業）を中心に活動し、何年も同じ業者からの受注で、作業内容にも慣れ、それぞれ得意な作業もあり積極的に取り組む姿があった。また、気候が良い日などは、ウォーキングや地域の清掃も取り入れ、心身共にリフレッシュをしながら日々の活動に取り組む。

課題として活動にメリハリをつけて目で見て分かり易い環境設定を考え、環境調整においても、パーテーションで区切ったり、机や椅子の配置を作業しやすく変更したりと工夫しながら活動に取り組んだ。これには、利用者個々の障がい特性にも配慮しながら取り組む事で、落ち着いて過ごすことが出来るようになってきた。また、利用者の意識の中にも今は作業時間、休憩時間のメリハリもついた様子もあった。また、利用者同士の関わりも非常に多く見られ、利用者同士で声をかけ合う姿等も見られた。

### 手工芸班

紙漉きを中心に活動を進める。また、昨年度から始めたオリジナル T-シャツやトートバックの作成も行ない、封筒、一筆箋、カレンダー等々の和紙商品にも力を入れ、いろいろな方面からの受注及び、各施設がいのバザー等での販売もおこなった。

新しく特別支援学校卒業生を1名迎え、学校との連携を図りながら本人がスムーズに施設で活動になれるよう配慮した。その中で特に本人の気持ちに寄り添い、困っていること、不安なこと、楽しいことは何か等、気持ちを確かしながら支援をした結果、早く環境にも慣れ、いろいろな活動に取り組んでいる。

昨年度取り組んだ課題として、こだわりのある利用者への急な予定変更の対応に関しては、丁寧な説明を行いながら本人の気持ちに寄り添い、不安や戸惑いを解消するよう努めた。それぞれの特性に応じて、予定を明確に伝え、曖昧な対応を避けることで理解を促進できた。その都度、利用者から質問が多くされたりすることはあるものの、その一つひとつを大切に受け止め、個別に対応することでひどい混乱は見られなかった。利用者個々のペースを大切にし、焦らずゆっくりと関わり、「待つ」「聞く」といったことを中心に信頼関係を築いていった。

### 園芸班

新たに若干名の利用者、職員が増え、より一層職員間の連携が必要とされた。新規の利用者に関しては特に特定相談支援事業ふーぷとの連携を図りながら、日々の支援に取り組んだ。

活動に関しては、畑作業、ポスティング等に加えて新たに内職作業があり、その日の利用者の状況に応じて、今までより多様に活動を展開することができた。その中で、今まで慣れていた畑作業より新しい内職作業が楽しいという利用者も数人見られ、今までにない利用者の一面も見ることができた。

利用者の増加に伴い、活動場所などの物理的な面での難しさはあったものの、活動場所横の和室を工夫して利用しながら、作業場所の拡大と区割をして利用者にも分かり易い状況を作った。まだまだ、解消されていない部分もあるが、作業場所を工夫し広げることで利用者のパーソナルスペースが確保できた。出勤率は昨年同様ほぼ 100%に近く、毎日元気に過ごすことができた。

### ふきのとう班

利用者、職員配置人数に変更なくスタートした。活動内容においても、午前は室内運動、散歩をメインに午後からは創作活動、トランポリン、ミュージックケア、モーターアクティビティーズを中心に実施した。また、寄付などでストラックアウトやフライングディスク等を購入し、モーターアクティビティーズの活動の幅も広がり、利用者の生き生きとした表情が多く見られた。

毎日の活動プログラムを一定の順番で繰り返すことで、利用者一人ひとりが日々の活動への理解、体調管理の促進になっている。それぞれのプログラムの内容に関しては、職員が工夫しながら取り組み、マンネリ化しないように努めた。特に運動系、音楽系のプログラムは他班の利用者に人気もあり、参加者も多く受け入れることで、ふきのとう班以外の仲間と一緒にプログラムを楽しむ姿が見られた。出勤率についても、昨年同様安定し、毎日元気にあゆみの活動を楽しんでいた。

### つむぎ班

昨年度途中からの奈良市内の K 株式会社の受注作業を主な活動として展開する。特別支援学校卒業生を 1 名迎え入れ、必要に応じて学校との連携を図り、スムーズな施設での生活に移行できるよう配慮した。さらに、受注作業がない時は、軽作業班の内職をしたり、園芸班の畑のお手伝いをしたりと幅広く活動している。年度途中には、新しく利用者も加わり、8名の班となった。環境的に配慮しながらもポスティングやパン販売など施設外での活動にも取り組み、元気に過ごしている様子が伺えた。

また、同じ場所で、火曜日、木曜日の午後はさをり織りの作業場としても利用している。これを利用して、普段いけない図書館へ行ったり、様々な活動を取り入れている。

課題としては、活動場所が離れているということで、職員間の連携や情報共有という部分が挙がった。今後これらについて、どう連携していくか考えていく必要がある。ただ、利用者同士は、昼食や休憩時間など交流し、今まで同様のコミュニケーションを図っている姿が見られている。

## 総評

生活応援団を掲げ日々の活動に取り組む。また、今年度は利用者のストレングス（強み）を引き出せるよう日々の支援を心がけた。周囲から見れば、問題行動、こだわり行動に見られることが、よく見るとそれらが逆に強みに変わったり、利用者の気持ちの裏側にあるものの表現だったという部分がある。支援者がそれらを見ることで利用者一人ひとりを多面的、多角的にとらえ、その人のストレングス（強み）が見えてくるようになり、やりがいや楽しみに繋がったように思う。

利用者同士の関係性や個別のニーズに関しては、ケース会議や担当者会議などで相談支援ふりふとの連携をもち、施設内で取り組む内容を明確にした。その中で人、物等の環境調整の必要性や関わり方の工夫などが挙がり、我々職員の支援を見直すきっかけともなった。

さらに、年度途中から月1回の全体会議に加え、月1回班長会議も実施し、各班での連携を図り、情報の共有や他班からの意見も参考にしながら、支援の幅を広げ職員全体で取り組み、利用者同士の関係性や個別のニーズに活かしていけるようにした。

昨年度の課題であった指導的な声かけや関わりについては、虐待研修や強度行動障害研修の報告会を持ち、不適切な関わりや行動制限など職員の意識に働きかけるよう努めた。利用者の声に耳を傾け、想いに寄り添うことをより一層大切にしながら職員全体で取り組んだ。

一人ひとりにあった自己選択、自己決定については今後も考えていかなければならない点があり、特に班でのミーティングの持ち方、活動方法、情報の伝達方法に様々な課題ある。また、それらを工夫し検討することで、利用者一人ひとりの本人らしい生活や楽しみ、やりがいのある活動に向けてより良い支援に取り組んでいかなければならない。今年度の取り組みを活かしながら来年度も継続出来ればと思う。

来年度も引き続き、利用者自身が主体的に考える事に重点を置き、自ら選択し、答えを導き出せるよう、「支えあう仲間」として日々の生活を送れるよう取り組んでいきたい。

以上